

剣をとる者は剣にて滅ぶ

一沖繩伊江島 聖なる農民の声を聞け

奨励	榎本 恵 [えのもと・めぐみ]
奨励者紹介	宗教法人アシュラムセンター主幹牧師 財団法人わびあいの里理事

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。イエスは、「友よ、しようとして打っていることをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅ぶ。わたしが父にお願いできないでも思ふのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」またそのとき、群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。」このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

(マタイによる福音書 26章47—56節)

聖なる農民の声を聞け

おはようございます。今日はこうして京田辺の水曜チャペル・アワーで、皆さんとともに礼拝を守ることができていることを心から感謝します。私自身、同志社大学の卒業生です。1984年に卒業しました。そのころの同志社大学は京田辺移転反対運動が盛んに行われていたころでした。よもや、この京田辺校地に、自分が来るとは思ってもいませんでした。30数年という年月は隔世の感があると思います。また、私は原先生と、偶然沖繩県の伊江島で、また、タイでも出会ったことがあります。

さて今日は、この30年以上の間、私自身がいろいろと経験してきたこと、特に沖繩に行つて経験したことと、そこで考えたことを皆さんとともに分かち合いたいと思い、やってまいりました。そう思っていたら、昨日突然、大変なニュースが飛びこんでまいりました。政府は、沖繩防衛局(旧那覇防衛施設局)の田中聡局長を更迭したと発表しました。皆さんも、どういう事情かは、新聞等を通してご存じかと思ひます。現在、沖繩では、辺野古の美しい海を埋め立てて、新しい基地をつくらうとしている。それに対して沖繩の人たちが反対しているなかで、12月に一つの大きな山場を迎えようとしている矢先なのです。

野田政権が、アメリカのオバマ政権の後押しで環境アセスメントを提出する。それによって埋め立て工事を始めると宣言する事態が起ころうとしている。その事業に対して、国が3000億という巨大なお金を沖繩県に交付金として出す。その取引として環境アセスメントを認めるのではないだろうかと、皆が恐れていた矢先、沖繩防衛局長が自らの大変な発言によって、更迭されることが起こったわけでありませぬ。つい熱の入った話をしましたが、私はここへ政治の話をしにきたわけではありません。信仰の話をしにきています。

けれども私たちの日常のさまざまな出来事のなかに信仰がなければ、それは自分たちの心をただ安定させるシステムとしての信仰に陥ってしまうのではないかと。そうすると、政治であれ、経済であれ、ただの机上の空論になってしまうのではないかと。同志社のチャペル・アワーで成そうしている業が、ただ単に、私たちの心の問題としてだけの信仰であるならば、それは違うのではないかなと思ひます。今日はここに学生さんが来てくださったことを本当に喜んでます。皆さんが来てくださったことが同志社の良心になっていくのではないかなと思ひます。

今日の聖書の箇所、「剣を取る者は皆、剣で滅ぶ」。あの有名なイエスの言葉を通して少し皆さん方と分かち合いをしたいと思ひます。

「沖繩、伊江島、聖なる農民の声を聞け」。それは私が今から20数年前、1987年、沖繩県の北部の離島、伊江島という小さな島で出会った言葉です。

「剣をとる者は剣にて滅ぶ」。それは伊江島の阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)さんという、非暴力の抵抗でアメリカ軍と闘っていった一人の農民であり、また反戦地主としてアメリカ軍に広大な基地をとられて、それに対して基地を取り戻すために運動をしていった方から、何度も聞いていた聖書の言葉です。伊江島の、阿波根さんがおつくりになった、「団結道場」という建物の壁面いっぱい、書きつらねてあった文章です。

- 一、土地を返せ ここは私たちの国  
私たちの村 私たちの土地だ
- 一、侵略者伊藤博文 東條の悲劇に学べ  
汝らは愛する家族が  
米本国で待っている
- 一、聖なる農民の忠告を聞け  
さらば米国は永遠に栄え  
汝らは幸福に生きのびん  
剣をとる者剣にて亡ぶ(聖書)  
基地を持つ国は基地にて亡ぶ(歴史)  
一九五五年五月  
伊江島土地を守る会

私はそれを初めて見たとき、脳天を割られるような思いがしました。聖書の言葉を、生きて働くということ、本当にそのときに初めて知ったような気がしたからです。

阿波根昌鴻さんは、2002年にお亡くなりになりました。来年は亡くなって10年目になります。また来年は沖繩が本土復帰、アメリカの施政権から日本の技術、政治のなかに戻ってきた、その節目の年になる年でもあります。阿波根昌鴻さんのことをジャーナリストの筑紫哲也さんが紹介しています。阿波根昌鴻さんがどういう方かということ私に説明するより、よくわかると思ひますので、読ませていただきます。

「住民たちを縛りあげ、家を焼き払い、土地を奪う。サトウキビなどの農作物を故意にグラグラ笑いながら焼き払う。君たちが、弾拾いがやりよいために焼いたと暴言を吐く。確かに土地を奪われて、焼かれた農民は生きるために弾拾いをせざるをえないのだが、その農民をカービン銃で撃ちまくり、追い散らし、重軽傷を負わせたり、逮捕、投獄する。住民380人のうち爆死2名。射殺1名。重軽傷54名。逮捕、投獄者50名余り。だが、それ以外の人たちが安全だったわけではない。連日連夜の爆撃訓練で幼児は泣き止まず、子どもは勉強できず、大人は神経質となり、唯一の慰安であるテレビも聞き取れない。

世界中でゲリラ戦士やテロリスト志願者が絶えないのは多かれ少なかれ、これと似たような状況があるからである。中でも失うものがなく、恨みのみが残った者が、自爆テロリストになる。だが、沖繩戦から10年たって伊江島で起きたこの状況からはテロリストは生まれなかった。代わりに一人の伝説的人物を生んだ。阿波根昌鴻である。テロと対極の徹底した非暴力が彼の選んだ闘いの基本だった。米軍によって生活の基盤をすべて失ったことを示すために島民を率いて乞食と化して本島を放浪行進する。文字通り捨て身の闘いだった。にもかかわらず、相手を強大な敵とは見なせず、むしろ理解すべき対象となる。精神世界では自分を高い位置に据えていた」(沖繩タイムズ紙「多事争論」より)。

阿波根昌鴻さんが、どういう方か良く表れています。

伊江島では、戦後すぐこの島の3分の2が米軍基地にブルドーザーと銃剣によって奪われていきます。それに対して、土地を奪われた農民たちは生きていくことができない。自分たちの土地を二度と戦争のために使ってほしくない、その思いをもって基地撤去運動を始めました。しかし相手は武装した強大な権力である米軍です。それに対して、農民にすぎない伊江島の人たち、彼らはそのなかで、非暴力に立つてこの運動を進めていきました。たくさん犠牲者が生まれる。たくさん怒りや憎しみが渦巻いていくなかで、なおも彼らは非暴力に徹していた。そして米軍に対して自分たちは、精神的にあなたたちよりも勝っているのだという思いをもって闘うようになります。そのために非暴力の規定をつくり、そして一つひとつ交渉しながら土地の返還運動を勝ち取っていった。その運動の代表者が、阿波根昌鴻さんです。

彼は農民であり、また熱心なクリスチャンでした。私は、彼の最晩年に一緒に伊江島で過ごし、その働きをお手伝いするという幸運に恵まれ、財団法人「わびあいの里」という平和資料館をつくる財団を設立するお手伝いをし、今のその財団の理事をさせていただいております。私にとって、伊江島の原点は団結道場の小屋一面に書かれていた「剣をとる者剣にて亡ぶ」という言葉でありました。

平和を求めること、また非暴力であることは大変困難な難しいわざであります。聖書を読みますと、あのイエスを捕縛しようとしてきた役人たちを前にして「剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって」と書いてあります。イエスは非暴力ではなかったのではないかとこの神学者たちの中にはいるわけですが、しかし、そうであってもなお、私はイエス・キリストの「剣を取るものは皆、剣で滅ぶ」という言葉、これはまさに真実の言葉であると思ひます。と同時にこの非暴力、武器を用いずに平和をつくりだしていくこと、それは本当に困難であるけれども、私たちがなおチャレンジしなければならないものであると思ひます。

生ける神に依り頼む信仰

非暴力、それは果たして方法論だけの問題でありましようか。武器を用いずに抵抗する。また武器をもたずに抵抗はしないけれども、言葉の暴力をもって抵抗することもありうるわけです。本当に非暴力であること、そのことは大変難しい、現実には難しいことであると私たちは考えます。けれども、非暴力であること、武器をとらない、それは実は方法や倫理の

問題ではなく、私たちの信仰の問題であると思うのであります。

旧約聖書の中には有名なダビデ王の物語が数多く出てきます。その中の一つのエピソードに、イエスもそのエピソードを警えの中で採り入れられましたけれども、神殿に備えられたパンを食べるといふダビデの行状が書かれたところがあります。旧約聖書サムエル記上の21章です。

ダビデは、ノブの祭司アヒメレクのところに行った。ダビデを不安げに迎えたアヒメレクは、彼に尋ねた。「なぜ一人なのですか、供はいないのですか。」ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王はわたしに一つのことを命じて、『お前を遣わす目的、お前に命じることをだれにも気づかれない』と言われたのです。従者たちには、ある場所で落ち合うよう言いつけてあります。それよりも、何か、パン五個でも手もとにありませんか。他に何かあるならいただけますか。」祭司はダビデに答えた。「手もとに普通のパンはありません。聖別されたパンならあります。従者が女を遠ざけているなら差し上げます。」ダビデは祭司に答えて言った。「いつものことですが、わたしが出陣するときには女を遠ざけています。従者たちは身を清めています。常の遠征でもそうですから、まして今日は、身を清めています。」普通のパンがなかったので、祭司は聖別されたパンをダビデに与えた。パンを供え替える日、焼きたてのパンに替えて主の御前から取り下げた、供えのパンしかなかった。そこにはその日、サウルの家臣の一人が主の御前にとどめられていた。名をドエグというエドム人で、サウルに属する牧者のつわものであった。(サムエル記上21章2—8節)

これが有名なダビデがサウル王から追われ、そして逃げながらも祭司アヒメレクのところに行き、食を求めた有名な聖書の箇所です。イエスも、あの道端で麦の穂を摘むとき、それを咎められたときに、ダビデの故事を引用するわけですが、実はこの後にもう一つ、大事なことが書かれています。

ダビデは更にアヒメレクに求めた。「ここに、あなたの手もとに、槍が剣がありますか。王の用件が急なことだったので、自分の剣も武器も取ってくるのができなかったのです。」祭司は言った。「エラの谷で、あなたが討ち取ったペリシテ人ゴリアトの剣なら、そこ、エフォドの後ろに布に包んであります。もしそれを持って行きたければ持って行ってください。そのほかには何もありません。」ダビデは言った。「それにまさるものはない。それをください」(同21章9—10節)。ダビデはこうに言ったのであります。王から追われ、逃げまどい、食を求め、そして彼は剣を求めた。ところがそこにあった剣とは、かつてダビデが、あの大男ゴリアテに素手で戦いを挑んだとき、サウル王がダビデに剣を与えようとしたら、「そんなものは、いらぬ。私は主の名によって戦う」と言ったときの剣です。そのダビデが、窮地におちいったときに、ゴリアテの剣を「これに勝るものはない」と言ったのです。

剣を取る、それはただ武器を取るということではなく、この窮地のなか、困難のなかにあつて、私たちが何を頼りにしていくのか、私たちが何を自分の拠り所として生きていくのか、そのことが問題なのではないかと思うわけです。非暴力であること、また無抵抗であること、それは決して方法論ではない。非暴力であり、無抵抗であることを決意した人間が何を拠り所として闘ったのか。そのことが一番の問題であります。こちらでも先程も歌いました、讃美歌21 471番『勝利をのぞみ “WE SHALL OVERCOME”』を賛美しながら1950年代、1960年代と、アメリカの黒人の公民権運動がなされていった。そのリーダーが、マーティン・ルーサー・キング牧師であります。非暴力に生き、黒人の公民権運動で闘った、キング牧師の言葉です。

「世の中には、余りにも多くの挫折感があり過ぎる。それは、私たちが生ける神(God)よりも、この世の神々(gods)に依存してきたからである。私たちが科学の神にひざまずくことによって手にしたものは、結局、科学では静めることができない恐れや不安を生み出す原子爆弾であった。私たちが快楽の神を拝んだ結果、分かったことは、興奮や扇情のもろさはかなさであった。また金銭の神に拝礼した結果、この世には金で買えない愛や友情があること、いつ不況や株式崩壊や悪い企業投資が起こるか分からない世界では、金銭は、むしろ不安定な神でしかないことに気づいたのである。これらの束の間の神々は、人間の心を救ったり、幸せにしたりすることはできない。生ける神のみが、そうできるのである。私たちが再発見しなければならないのは、その生ける神に依り頼む信仰である」(『キング牧師の言葉』C・S・キング著 日本キリスト教団出版局 1993年)。

1950年代に彼が言った言葉であります。けれどもこの言葉はまさに今、私たちの目の前に起こっているさまざまな問題を考えるとき、最もふさわしい言葉ではないかと思うのです。私たちが科学の神にひざまずいた結果、今、私たちの国は、そして世界は、あの放射能の恐怖に脅えているわけです。そして私たちが金銭の神にひざまずいた結果、日本をはじめ欧州各地で起こっている今の経済危機、それらのものが私たちの目に入ってきます。キング牧師が「これらの束の間の神々は、人間の心を救ったり、幸せにしたりすることはできない。」と語ったこと、ダビデが、自分が追われてきたときに、ゴリアテの剣を「これに勝るものはない」と言ってしまったこと、それは決して過去の出来事でもなければ、イスラエルの歴史の話でもない。まさに私たちが、生ける神以外の者を神とし、「それに勝るものはない」とした、目の前にある現実なのです。

剣を取らない、剣を使わない、それは決して「非暴力に生きる」という方法の問題ではない。私たち一人ひとりが、何を本当の頼りとなるものとするのか、問われているのではないかと思うのです。しかしそのことは、決して簡単なことではありません。

## 戦争の後始末

私は、阿波根昌鴻さんと一緒に伊江島の地で平和運動を行ってきました。平和運動ということで、最初反対運動をして、旗を振ったり、座りこみに行ったり、デモ行進をしたりすることだと思っていました。ところが彼と一緒に伊江島の地でやったことは、毎日毎日、島に土地に木を植えていくことでありました。朝早くから夜遅くまで、ただ木を植えていく。毎日毎日続く、同じことの繰り返しに、若い私は、意味がわからなかった。ところがある日、阿波根さんがこうおっしゃったのです。「これは戦争の後始末だよ。戦争の後始末。人間は戦争の後始末もしないうちに、もう次の戦争の準備をしている」。彼は沖縄の伊江島で、すべてが廃墟になったこの島で一本一本、木を植え続け、しかし同時にそれはまた人間が新たな戦争に、後始末もしないうちに突入していく姿を戒める、それが彼にとって「戦争の後始末であること」でした。私たちはほとんど前に進んでいくことをよしとし、目的とする。昨日よりは今日、今日よりは明日と進歩し、大きくなるのが私たちの価値であり、そのためには何か大きな力、大きなものに、より頼む。そして経済力や政治力を頼りにしてしまふ。一見するとそれらのものは強く、そして魅力的なものにみえます。しかし、それらのものは本当の幸せではない。本当の豊かさは与えてくれない。

戦争の後始末をしなが、阿波根昌鴻さんは、もう一つ大事なことをおっしゃいました。それは「負けて勝つ」。負けて勝つ、それは決して「負けるが勝ち」というような消極的な意味ではなく「負けて勝つとは勝つまで闘い続けることだ」と。非暴力の抵抗運動、それは一見すると弱々しく、この世の大きな力の前には無力のような、何の力もないように見えます。それはある意味においては、負け続けている敗北者の姿であるかもしれない。けれどもそれで終わるのではなく、負け続けながらも、守り通してきたもの、それは決してそこで終わるのではなく、必ず勝つ、必ず勝利を迎える日まで続いていくものであるという信仰に立った言葉であると思うのです。

沖縄防衛局長の「沖縄を犯す」という言葉、侮蔑的な表現を使っているわけですが、それ以上に彼の本心を明かす言葉に、こういうものがあります。「沖縄は66年前の戦争で重がいたのに被害を受けた。400年前の薩摩藩の侵攻の時は、琉球(沖縄)に軍がいなかったから攻められた。基地のない平和な島はありえない。沖縄が弱いからだ」。こう彼は言ったのです。琉球が弱い、琉球が犯される。それは琉球が武器をもたない、弱いからだ。だから武器をもつことが必要なのだ。それが彼の本心であります。少なからず、これは今、日本の現在の政治状況や多くの人びとの心を覆っている一つの感情でもあると思います。「非武装中立なんて言っていたら国は守れない。それは夢幻だ。ある程度の防衛力をもたなければ、それこそ私たちは侵略される。中国、北朝鮮に滅ぼされてしまうのではないか」。

そのような思いや、空気が、私たちの目の前にある。そのとき、私たちは私たちの周りにある神ならざる神が、「これに勝るものはない」と見えてきてしまう。かつて大変な戦争の被害を被った沖縄の島に今また、自衛隊が配備されようとしている。まさにゴリアテの剣がダビデの目に「これに勝るものはない」と見えた、それと同じようなことが、今、この国で、政治の世界で、また私たちを覆っている空気のなかで、「非武装なんて夢物語のような話ではないか」と思っている人たち、そしてそれは「弱者の論理」であると考えている人たちが、大勢生まれている。しかし、このような状況のなかで、私たちはもう一度、高らかに、あの沖縄の阿波根昌鴻さんのように、聖なる農民の声を聞いて「剣をとる者は剣にて滅ぶ」という声をあげ、キング牧師が言ったように「束の間の神々は人間の心を救ったり、幸せにしたりすることはできない。生ける神のみが、それをできるのである。私たちが再発見しなければならないのは、生ける神に依り頼む信仰である」というふうに、この言葉を思い起こさなければならないのではないだろうか。

この世は不条理な暴力が満ちあふれているところでもあります。私たちが決して、あの時代や聖書のなかの世界のように差し迫って明日、命を奪われるとか、そのような状況におかれているわけではありません。けれども、私たちの周りを実はたくさん暴力が、私たちを取り囲んでいる。現実の生活のなかで、これから学生の皆さんたちは社会に出ていくなかで、さまざまな不条理な暴力にさらされていくことになります。しかしそのときに、どうか、覚えておいてほしい。「剣を取る者は皆、剣で滅びる」という聖なる言葉、私たちが本当に、より頼むべき者は、束の間の神ではなく、本当の生ける神であり、そこに立って自らが選びとっていくようになれば、私たちが政治の問題だろうが、経済の問題だろうが、社会の問題だろうが、どんな問題にでも、信仰の上に立ち、判断していくことができる者となるのではないかと思います。どうか本当の神さまに、より頼んでいき生き方を生じていただかないと祈っております。